
夏祭りの夜に

水守中也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏祭りの夜に

【著者名】

水守中也

N2968N

【あらすじ】

深夜の公園で出会った少女が言った。
「さて問題。あたしはなぜここにいるのでしょうか?」

薄汚れた街灯が、青年の身体を照らす。

深夜、気分転換に、彼はあてもなく外出した。

夏の夜。蒸すかと思いや、部屋の中とさほど変わらなかつた。密封されクーラーの効いた部屋は、いつの間にか、外気に追い付かれていたようだ。

闇の広がりが、どこまでも続いてゆく。昼間と違つた開放感があつた。

駅と反対方向に歩く。

電線の下につるされた提灯が、橙色に染まっていて、幾つも連なつていた。町内の掲示板に書かれていた夏祭りが、今夜だつたことを思い出す。

興味はなくはないが、もう終わつているだろう。それにせつかくの暗闇と静けさがもつたいない。彼は道をそれで少し先の公園に入つた。進学を機に引っ越したこの土地では、アパートと駅の往復しかしていなかつたので、ここに入るのも初めてだつた。

照明はなく、街灯と提灯のあつた路上より、はるかに黒に染まつている。闇の中の何もない空間を進む。弱い月明かりに照らされて鉄棒とランプが片隅に申し訳程度にあつた。

奥の湿つていそうなベンチに腰掛ける。求めていた静寂は虫の音に遮られてしまつたが、不快な音ではない。ぼんやりと空を見上げる。うす雲に隠れた月が見えた。子供のころ見ていたアニメのエンディングテーマを思い出し、苦笑する。埼玉に海はない。

彼はズボンのポケットから、使い古されたメモ帳と、ペンをとりだした。落書きのようなネタが乱雑している。思い付いたときは素晴らしく感じたものも、後から読むと、意味不明なものばかりだつた。

彼は現在、夏休みを利用して小説家養成スクールに通つている。

だがそろそろ講義も終わるというのに、上達しているのか実感が湧いてこない。現に、課題の締め切りが迫っているのに、全然アイデアが浮かばない。

ぼんやりとしていると、砂をこするような足音が耳に入った。びくっと前方に目をやる。一瞬、夜遊びしている不良たちが現れ、カツアゲでもされるのかと思ったが、公園の入り口付近に立っている人影はひとつだった。

遠くて暗いため顔は見えないが、黄色の浴衣が目に映えた。小柄で華奢な女性だった。

彼は視線をメモ帳に戻した。暗闇の公園。若い女性が一人で近寄つてくることはないだろう。

しかし予想に反して彼女は近づいてきて、彼の前で立ち止まつた。うつむいている彼からは見なくて、ベンチに座る彼の手元を覗き込んでいるのが、感覚で分かる。

顔を上げる。さきに声を出したのは、彼の方だった。

「……なんですか？」

「いや。こんなに真っ暗なのによく字が書けるなーって」

彼はメモ帳を閉じた。実際、暗くて読み直す気も書きこむ気もなくなっていた。

女性は、少女と称した方がよい年齢だった。高校生ぐらいだろう。浴衣に合わせて、髪の毛も後ろで結っていた。そのため、細い首と小さな肩幅が露わになっていた。

暗がりの公園で出会った見知らぬ男女。どこか物語っぽい。そんな妄想が浮かんで、彼はこっそり苦笑した。暗いので表情は分からぬだろう。

「ねえ、なにしてたの？」

「小説のネタを考えていたんですよ」

頭の中の考えも手伝って思わず答えてしまい後悔した。彼は自分が小説を書いていることを、あまり他人には知らせていない。何度も

か馬鹿にされたからだ。

けれど彼女は笑わなかつた。後ろ手を組むと、少し前かがみになり彼の顔を覗き込むように言つた。

「さて問題。あたしはなぜここにいるのか？ 何者でしょ？」

「……はい？」

「なんか小説のネタになりそうだったから。今の私たちって、傍から見れば何かの一シーンみたいじゃない？」

驚いたことに、彼女も彼と似たような考えを持つていた。

「だから……って、ネタになりますかね？」

「うーんと、例えば、真っ暗な公園で出会つた少女は、実は夏祭りを楽しみにしていた幽霊だつた、って面白いと思わない？」

「はあ……」

「つてなにそのため息？ 実は私幽霊なの！ つて信じてないでしょ？」

「はい」

「じゃあ、さ。私、実は家出少女だつた、つて可能性は？」

「それも没」

「なんでーっ」

「小説のネタとしてはありきたりですよ。それに家出つて、たいてい目立たない格好か動きやすい服装でするものですから、浴衣はそれに反しますよ」

「むう」

「こう見えても、推理小説を書いているものとして」

膨れていた彼女が、急に勝ち誇つた。

「それなら私にも分かるよ。あなたは彼女がいません。おそらくお付き合いしたことありません。年下の女の子に対する丁寧語は、女の子の扱いに自信のない現れです」

「うつ」

強引な推理だったが正解だった。もつとも丁寧語なのは別に女子に限つたわけではない。女の子云々以前に、自分に自信を持ってな

い現れでもあつた。

「で、答えは分かつた？ 彼女のいない推理作家さん」「枕詞は余計ですが、そうですね」

彼女はさつき「夏祭り」と口にした。浴衣を着ていればからも、夏祭りはキーとなるだろう。

迷子？ それはない。いくら華奢で幼く見えるからと書いて、両手に綿あめとヒロイン風船が似合う年頃ではない。

人待ちにしては、探すそぶりを見せないし、真つ暗な公園は待ち合わせ場所に適しているとは思えない。なにより時間も遅い。

ならば、彼女は約束をすっぽかされたのではないか。例えば彼氏に。いやもしかすると、実は彼氏とは「一緒に夏祭りに行こうね」と約束していたが、死別して、それで一人で来たとか。さきほどどの幽霊少女ネタはそれを示唆しているのでは……

「ふー、時間切れ。答え、実はこれ、全部あなたが見てている夢でしたー」

あまりの答えに、彼は唖然とした。

「夢オチはさすがに小説としては反則だと思いますよ…………」

「そうかなあ。夢 자체は悪いものじゃないよ。将来の夢、つてときも使うように、希望や願望が詰まったものだと思うの。寝て見る夢だって、どんな内容でもきっと、同じように前向きなものだよ。よつてハッピーエンド。どう？」

「……一概に夢が前向きなものとは言えませんが。それに物語の登場人物はハッピーハンドでも、その展開を読者がどう思うかが問題でしょう」

「あ、そつか。でも私はハッピーエンドが好き。それに、あなたがどう言おうと、この物語の夢オチで終わるの」

「……は？」

「だつて夢の中だもん」

彼女の小さな顔いっぱいに広がる無垢な笑顔を見て、彼は悟った。

「ああ。そつか。これは夢。」

だから彼女は……

「夢か……」

目が覚めて思わず出たセリフが、あまりに陳腐すぎて、僕の顔はゆるんでしまった。締切間近、追い込みをかけようとしていたのに寝てしまつたようだ。

さつきの夢は、細部こそ違うが、実際にあつた出来事だった。あの夜、彼女との出会いで何かを感じて出来た僕の作品は、講師から高い評価を得た。それがデビュー作となつたわけではないが、今は夢だつた作家として生活させてもらつていて。

奥から足音が聞こえ、こっちに向かつってきた。

「おはよ。よく眠つっていたみたいね。締め切り近いけど大丈夫？」

そして彼女は今、妻として僕の隣にいる。

「大丈夫。なんかやる気出てきたから」

「そう、良かつた。何か作るから、ちょっと待つてね」

彼女は夢の中を思い起こさせるような笑顔を見せて台所へ向かつた。

あの夜、彼女がなぜそこにいたのか。未だに彼女が教えてくれないため、真相は不明である。けれど。

「夢は願望、か」

「ん？ なんか言った」

15年前と変わらない、横に広がつた体型の妻を見て僕は苦笑した。

ま、好きだけどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2968n/>

夏祭りの夜に

2010年10月8日14時32分発行